

英語名詞の分類への新視点

三 浦 陽 一*

はじめに

英語は名詞を主語として、名詞の属性と様態を軸にして語る言語である。したがって英語の名詞がどのようなものかを知ることが英語研究と英語習得の第一歩であるが、外見上のわかりやすさのゆえか研究でも習得でも軽視されがちである。

学校文法では英語の名詞を五種類に分類している（固有名詞，普通名詞，集合名詞，物質名詞，抽象名詞）。しかし実用上は不定冠詞 a(n) や -s がつくかどうかの問題になるという観点から、〈具象名詞 concrete noun/ 抽象名詞 abstract noun〉（H. Sweet），〈可算 countable/ 不可算 uncountable〉（Jespersen），〈事物名詞 thing noun/ 質量名詞 mass noun〉（R. A. クロース『現代実証英文法』，1992 年）といった二分類も試みられてきた（名詞の分類については『英文法辞典』開拓社，初版 1966 年，475-476 頁も参照）。

以下に述べるように、英語の名詞はこうした二分類よりも伝統的な五分類が英語の実体観を明らかにしており、より適切である。しかしこの五分類は「なによりも各名詞相互の関係が明らかでないのが欠点」（大塚高信ほか監修『新英語学辞典』研究社，1982 年，776 頁）と言われるように、五つに分類する根拠や相互の関連がきちんと説明されてこなかった。

本稿は英語における名詞の位置づけと分類の根拠，相互移行についてこれまでなかった視点から整理する。（なお，本稿では代名詞は扱わない）

I 名詞—英語の実体観—

言語の話し手は**概念**によって対象を把握する。概念 concept とは「事物やその過程の本質的諸特徴を反映する思考形式で、人間の思考活動の基本的単位」である（森宏一編『新装版 哲学辞典』青木書店，1996 年，50 頁）。概念は人間が対象を認識するプロセスで形成され、音声や文字によって表現される。

* 人文学部教授—現代政治外交史

おのおのの語は対象を普遍性（種類）の側面にとらえてその特性を抽象し、他を捨象する（止揚）。これが概念化のプロセスである。人間は対象から概念を作ることによって無限に存在する具体的な事物や過程の本質的特徴をとらえ、概念を言語で表現することによって一般的なことがらを考えることができるし法則を発見することもできる。たとえば現実または想念のなかに赤くて丸い物体があるとき、絵画であればそれを個別的側面にとらえて独自の画像に描けばよいが、言語ではそれを普遍性（種類）の側面にとらえて「リング」と表現する。

概念の多くは対象を現象的に把握した日常的概念である（塩とは「白くてしょっぱい粉である」とする類）。しかし必要に応じて人間は科学的概念も用いる（塩とは「塩化ナトリウム NaCl である」とする類）。本稿で扱う名詞は日常的概念である。

英語が用いる概念には**実体・属性・条件・連結**といった種類がある。実体は名詞によって、属性は動詞（動的属性）・形容詞（静的属性）によって、条件は前置詞（他の実体との関係における付随的様態）・副詞（他の実体との関係をともなわない付随的様態）によって、連結は接続詞によって、それぞれ表現される。他に关系的な概念として**人称**と**時称**がある。

言語のベクトル平面に文を配列する

上記の概念を組み合わせることで英語の文を構成する言語規範が文型である。図 1 は英語の文型を文尾の語の実体性の濃淡によって配列したものである。この図の詳細は他稿で述べたので、ここでは繰り返さない。（三浦陽一「英語文型への接近」『南山大学国際教育センター紀要』11 号、2010 年 12 月所収）

概念は実体性の濃淡によって序列づけされる

図 1 で重要なことは、概念には実体性の濃淡によって序列があるということである。

実体 substance とは、「さまざまに変化してゆく物の根底にある**持続的なもの**、そうした変化によって様態を変えながらも同一にとどまり、つぎつぎに現れる**諸性質の担い手**として考えられるもの」である（栗田・古在編『岩波小辞典哲学』岩波書店、1958 年、83 頁。ゴチックは引用者。以下同様）。

概念のうちもっとも実体性が濃い語彙が名詞である。名詞はさまざまな属性をもち、それらの属性は名詞の概念のうちに止揚されている。だから名詞は文のテーマ＝主語となりうるものであり、文は名詞の属性や存在条件について述べるものとなる。名詞を筆頭として動詞、形容詞、副詞、前置詞、接続詞の順に実体性は薄くなる。

図 1 の四分円上にある N1 (Noun 名詞) → N2 → N3 → A → P (前置詞句) / AV (副詞句) は、実体性の濃いものから薄いものへと配列したもので、いわゆる五文型は SV に続く要素の実体性の濃淡による分類であることがわかる（図 1 では P と AV を概括して Cn=C(ondition と記している）。

図 1 から名詞(N)が存在する場所を抜き出したのが図 2 である。名詞には三つの“場”= S,

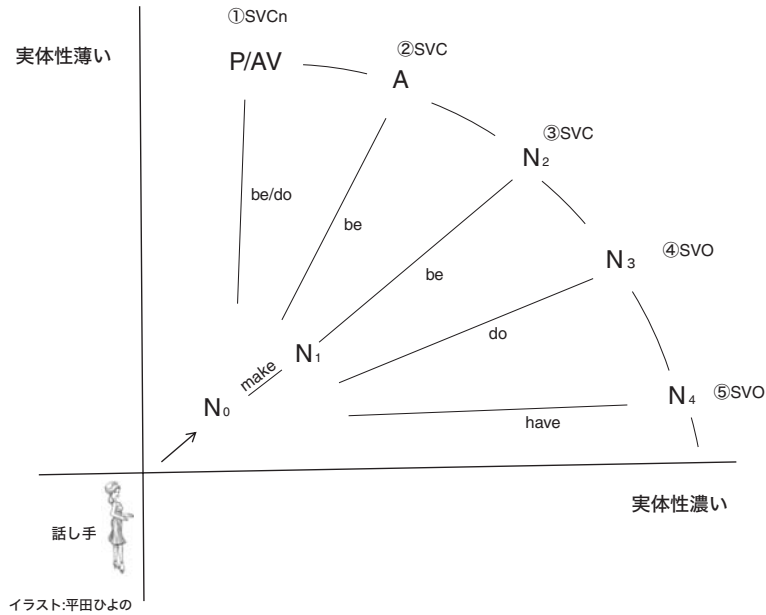


図1 英語の文型

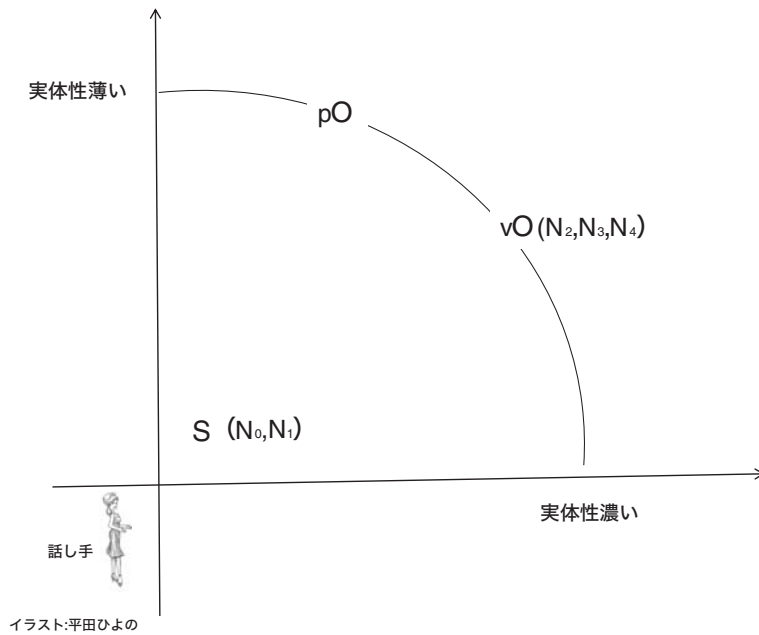


図2 名詞の3つの「場」(その1)

vO（動詞の目的語）、pO（前置詞の目的語）があり、実体性もこの順で濃いものから薄いものへと変化する（図 3）。

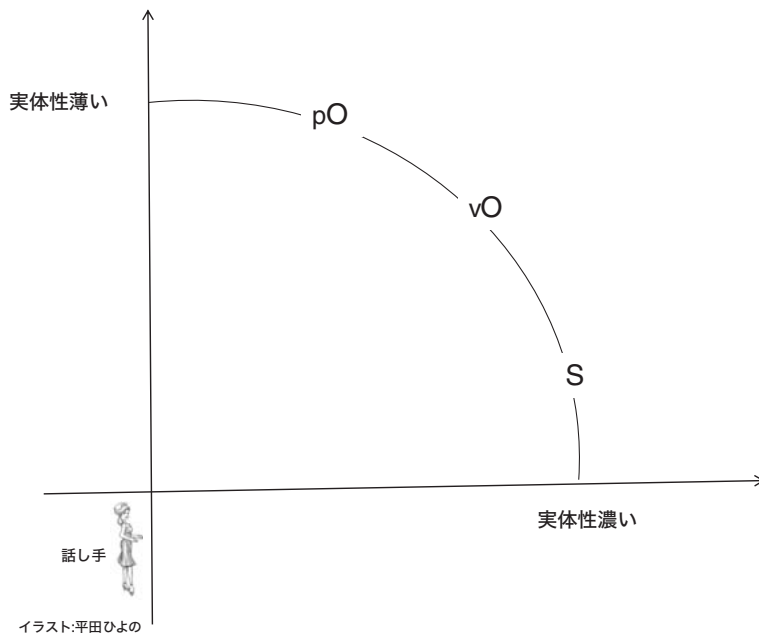


図 3 名詞の 3 つの「場」（その 2）

五種類の名詞—英語の実体観—

英語の名詞は実体の普遍性を五つの異なる側面においてとらえる。

- A：固有名詞 ある個物が時空の変化を超えてそれ自身であるという側面での普遍性（唯一性）
- B：普通名詞 ある個物が他の個物と共通の性質をもつという側面での普遍性（個性性）
- C：集合名詞 普通名詞と物質名詞との中間の普遍性（組織性，群れ性，小物性）
- D：物質名詞 物質が同種のものなら共通の物質的性質をもつという側面での普遍性（物質的等質性）
- E：抽象名詞 個物の違いを超えて共通する非物質的属性という側面での普遍性（非物質的等質性）

以上の五分類は実体性（諸性質の担い手となる根底的なもの）の濃いものから順に並んでおり、固有名詞がもっとも実体性が濃く、以下順次実体性が薄くなり抽象名詞がもっとも実

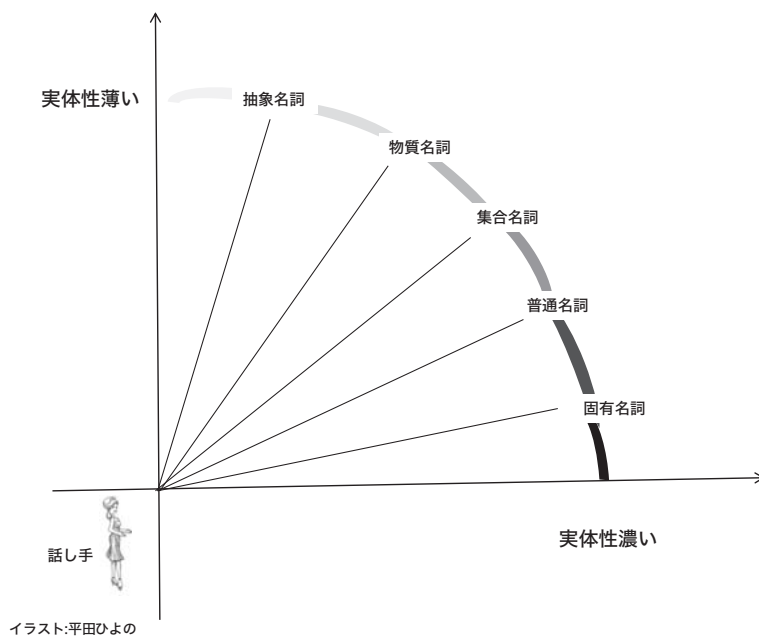


図4 実体性の濃淡による名詞の分類

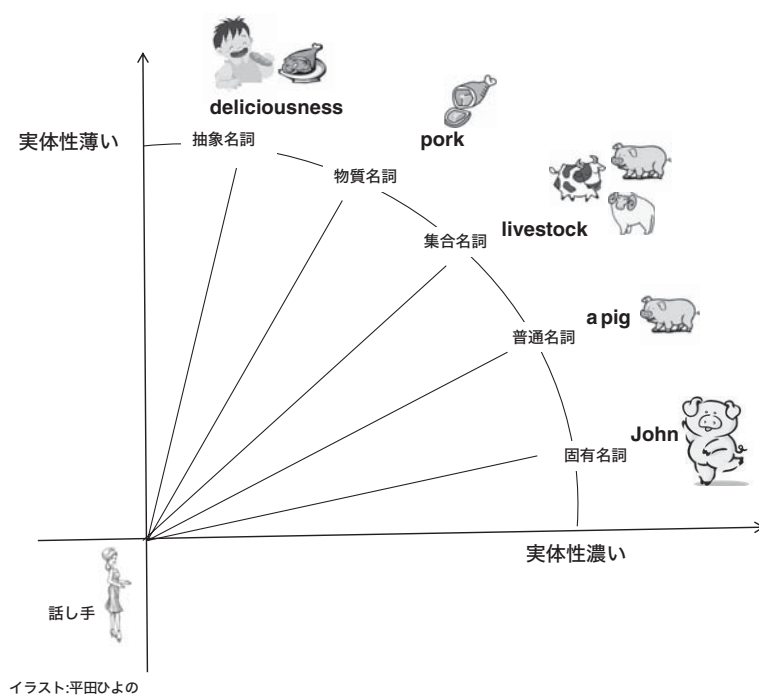


図5 実体性の濃淡による名詞の分類の例

体性が薄い。

これをベクトル平面に表すと図 4 のように配列できる。

五つの名詞の種類は、大きく二つのグループに分かれる。第一グループは実体の個物性に注目する固有名詞と普通名詞であり、第二グループは物質ないし非物質の等質性に注目する物質名詞と抽象名詞である。これら二つのグループを集合名詞が橋渡ししている。

この五分類は互いに断絶しているものではなくスペクトルのように連続している。図 5 は、同じブタの John 君（固有名詞）が「ブタ a pig」（普通名詞）→「家畜 livestock」（集合名詞）→「豚肉 pork」（物質名詞）→「おいしさ deliciousness」（抽象名詞）の順に実体性を減じながら表現されていく様子を表したものである。

以下に述べるように同じ名詞が違う種類へと移行して使われることもある。英語は実体をこのように五つに分類し、かつ柔軟に運用することによって、この世のあらゆる実体を認識し表現している。

II それぞれの名詞の種類は実体のどの普遍性をとらえているか

上述のように、概念は対象をその普遍的側面（種類の側面）でとらえた認識であり、英語の名詞は対象たる実体をどの普遍的側面でとらえているかによって五つに分類できる。

A：固有名詞

ある実体をそれ自身とだけ共通する側面＝唯一性でとらえた名詞。

Bob, Christmas, Japan, Jennie, Sony

ある人を a person と呼ぶこともできれば、Paul と呼ぶこともできる。a person は他の人と共通する側面（人であること）において認識したときの表現（普通名詞）であり、Paul は彼自身＝Paul とだけ共通する側面＝唯一性において認識したときの表現である。Paul が Paul であることは時や場所によって変わることがないから、唯一性は一種の普遍性である（宮下眞二『英語文法批判』日本翻訳家養成センター、1982 年、39 頁）。

固有名詞は他の種類の名詞に唯一性という強い実体性認識を付加したもので、五種類の名詞のなかでもっとも濃厚な実体性をもつ。

唯一性を明示するために固有名詞は大文字ではじめることが多い（the をつけて特殊性の側面を強調することで固有名詞化するルートもあるが、これについては別稿）。

固有名詞から普通名詞への転用

- ・ 同じ固有名詞がつく個体が複数ある場合。

He bought *a new Toyota*. (トヨタの新車を買った。)

Her mother was *an Obama*. (オバマ家の出身だった。)

- ・ ある対象を固有名詞の概念内容と比較させ、それに似たもうひとつのものであることを表現する場合。

France was about to become *an Italy* more Italian than Italy itself. (イタリアのようなもの)

He will be *an Edison* some day. (エジソンのような人)

上記の二つの文では直接の対象の認識 (France と he) から典型的事物 (Italy と Edison) を想起し, France と Italy に共通する側面または he と Edison に共通する側面をとらえて an Italy, an Edison と表現している。

B: 普通名詞

個体を同種の他の個体と共通する側面にとらえた名詞。

book, car, clock, cup, horse, piece

普通名詞の概念の普遍性とは、他の個体との共通性のことである。普通名詞は実体の個性性を止揚した（たとえ表現しなくても認識上は保存している）概念であり、この個性性に着目したとき冠詞 a(n) や -s が表現化する。

実体の個性性は a(n) によって表現されるが、英語では個性性の認識をさらに細分して表現できる。代表的な個性性の認識は〈個 piece・回 time・種 kind〉の三様である（図 6）。

これはさらに多数の助数詞（実体性が薄く抽象名詞に近いがなお個性性を保存した普通名詞や集合名詞）によって細分して表現できる。助数詞で臨時の「かたまり」を認識することで、結果として英語の名詞はほとんどすべて「数える」ことができる。たとえば a piece of information は、「個」を表す助数詞 piece を媒介にして抽象名詞 information を「数えて」いる。a kind of monkey ならば、「種」を表す助数詞 kind を媒介にして monkey の種類を「数えて」いる。この二例を図に示すと、図 7 のような軌跡となる。

以下、個・回・種の基本三分類にそって助数詞の例をあげておく。

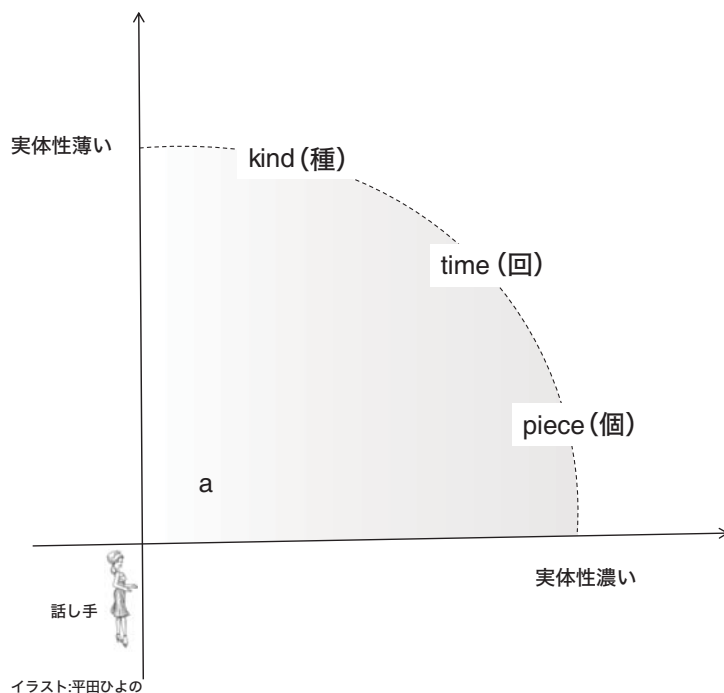


図 6 英語の個性認識の典型的三様

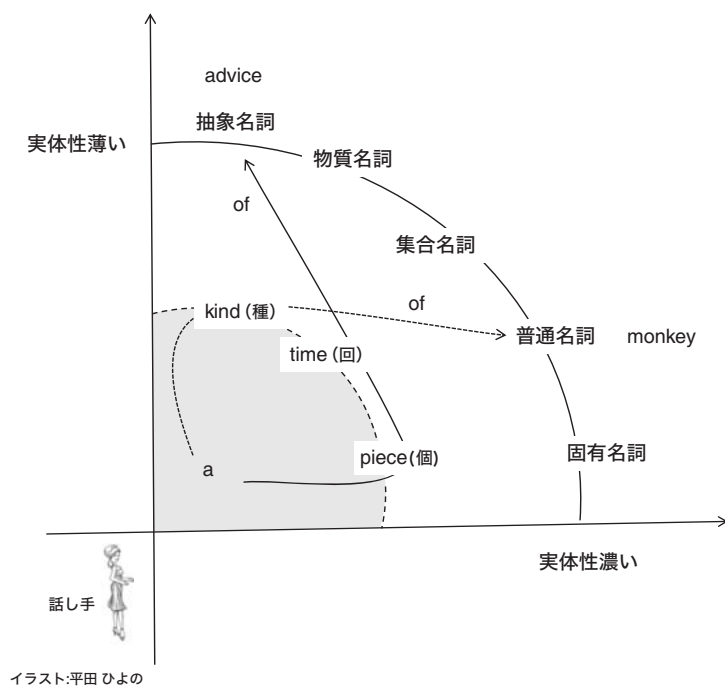


図 7 a piece of advice と a kind of monkey の軌跡

〈個 *piece*〉タイプ（空間的なまとまり）の助数詞

a *piece* of advice, a *cup* of coffee, a *cake* of soap, a *bunch* of flowers, a *heap* of earth, a *roll* of cloth, a *troop* of monkeys

〈回 *time*〉タイプ（時間的なまとまり）の助数詞

a *round* of visits（歴訪）, a *period* of hardship, a *month* of escape, an *attack* of malaria

〈種 *kind*〉タイプ（種類のまとまり）の助数詞

a *kind* of sadness, a *sort* of feeling, a *type* of food, a *pound* of beef

普通名詞の抽象名詞化

普通名詞については a(n) がつく場合がよく論じられるが、普通名詞は無冠詞で使われることも多い（たとえば辞書の見出し語はすべて無冠詞）。

普通名詞は同種の他の個体と共通する側面をいう名詞であり、他の個体と共通する面には個体性（個・回・種）のほかに動態や状態がある。冠詞がないまま使われた普通名詞の認識内容は実体の動態・状態（すなわち動詞的ないし形容詞的な属性の側面の認識）へと傾斜する。このとき普通名詞はいわば抽象名詞化した認識内容をあらわすので、a(n)を用いない。

ここでは普通名詞にみえるが抽象名詞化して無冠詞になる例をあげる。

日常的施設・交通手段 go to *school*, go by *bus* 学校やバスは多くの人が活動したり行き来しており、動態・状態に近い性質をもつから個体性よりも属性すなわち抽象名詞的に把握され無冠詞になる。町の中心部分 *town* が無冠詞になるのも同様の理由から。He has been out of *town* for a few days.（二、三日、町にいなかった。）

日常行為 at *home*, at *work/off work*, be in *bed*, go to *bed*, get out of *bed* 日常行為は動態・状態に近い抽象名詞化して無冠詞になる。breakfast, lunch, dinner のような習慣的食事も同様である。いつもと違う状況になって日常性が破られると a(n) や the で具体性を表現する。He had a business lunch yesterday.（きのう商談目的の昼食会に出た。）

季節名 季節名は the を使うとき（in *the* spring）もあれば無冠詞の場合（in spring）もある。無冠詞になるのは季節を状態的にとらえた（抽象名詞的な）認識のときであり、the をつけるのは他の季節との対比で特殊性を認識したときである。When *autumn* came, they had enough food for *the* winter. という文で無冠詞の *autumn* は気象状況の認識（→抽象名詞）であり、*the* winter は一年のなかの特定の季節を指す（織田稔『英文法学習の基礎』研究社、1990年、20頁参照）。

役職名 Lincoln was elected *President* of the United States in 1860. 公共性のある役職名が無冠詞になるのは、それが称号的（そのまま呼びかけの言葉になる）、形容詞的（継続的狀態）、かつ「固有名詞」的（特定の一人しかいない）であることのほか、役職名は役割＝動態・状態を指すからでもある。ただし特殊性を強調するなら the をつけてもよい。Lincoln was

elected *the President* of the United States in 1860.

スポーツ名 *play tennis*, *play golf*, *play baseball* スポーツの名前は大文字にはしないがそれぞれひとつしかないから固有名詞的であり、かつスポーツは動態・状態なので抽象名詞的でもあるので冠詞をつけない。

慣用句 *for example* (たとえば), *in fact* (実際), *at hand* (近くに), *play mother* (ままごと遊びをする), *eat crow* (恥をしのんで誤りを認める), *keep house* (家事をする) 慣用句は多くの場合にあてはまる一般的な状況を表現するので、普通名詞を無冠詞にしたほうが多くの同名のものに共通する状況が表現できる (→抽象名詞化する)。他方、冠詞を残したまま慣用化している表現も多いが、それは多少とも具体的な状況を言おうとする感覚を示す。Shall I give you *a ride*? (車でお送りしましょうか?) Let's go to *the* movies. (映画に行こう。) 無冠詞でも *the* つきでもいえる境界的な慣用表現もある。Why don't we do that [*the*] first thing in the morning tomorrow? (それ、明日の朝一番にやろうじゃないか。)

対句 *face to face* (面と向かって), *hand in hand* (手を取りあって), *from hand to mouth* (いきあたりばつちの暮らしで) 対句は関係の深い語どうしが引きあって独立性の高い抽象的な状況認識を作るので無冠詞になりやすい。対句は副詞句になることが多いので、名詞っぽさを漂わせる冠詞はないほうがすっきりするからでもある。He worked *day and night*. (昼夜問わず働いた。) The discussion continued *hour after hour*. (議論は何時間も続いた。)

普通名詞の物質名詞化・抽象名詞化

個物に共通する側面が物質的な均一的性質である場合、物質名詞としても使えることがある。動物名が食肉名に、植物名が飲料名になるなど、食べ物に例が多い。

chicken (鶏肉), *fish* (魚肉), *frog* (カエルの肉), *horse* (馬肉), *rabbit* (兎の肉), *whale* (鯨肉), *lemon* (レモン風味, レモン飲料)

果実のように特定しやすい色彩が含まれている普通名詞は色彩の名称 (抽象名詞) に使えることがある。

orange (オレンジ色), *grape* (ブドウ色), *lemon* (レモンイエロー), *raisin* (濃い青紫色)

その他の普通名詞の無冠詞化

状況じたいが固有名詞的 (唯一性が強い状況) ないし抽象名詞的 (一般性が強い状況) であるとき、普通名詞は無冠詞になる。

RESTRICTED AREA (立ち入り制限区域), Ticket Fares (チケット料金表), IMPORTANT NOTICE (重要なお知らせ), Line forms on other side. (反対側に並んでください) **看板** 看板は読み手と共有する状況が特定しており、状況に特定性が強いので冠詞が省かれる (固有

名詞的状況)。いわば文全体が the でおおわれているような感覚。

Fishing Boat Sinks; 12 missing (漁船沈没, 12 人行方不明) **新聞の見出し** その日の紙面とその日の読者という状況上の唯一性によって文全体が固有名詞的となる。boat を無冠詞にし動詞も現在形にすることで生々しい臨場感(固有感)を高めている。

CONTENTS (目次) **本の見出し**, *inside* ([あるものの] 内側) **写真のキャプション**, see previous *page* (前ページを見よ) **脚注** そのページと読者という強い限定感がある(いわば固有名詞的状況がある)ので冠詞の必要がない例。

pencil n. a narrow pointed wooden instrument... (鉛筆一名詞。細くて尖った木製の道具で……) **辞書の見出し** 辞書は同名のものと共通する側面を説明する書物なので、個性を言うことは不適切で無冠詞。

Snake! (へびだ!) **驚き**, *Happy Birthday!* (誕生日おめでとう!) **祝福** 強い感情をとともう特別の状況なので固有名詞的で無冠詞。

We're family. (仲間だろ。水くさいじゃないか。) **親しさ** 日常会話で冠詞を省き、生き生きした動態・状態を強調。抽象名詞的に無冠詞。

Be quiet, boy. (君、静かにしなさい。) **呼びかけ** 相手を固有名詞で呼ぶかわりに普通名詞を使っている。普通名詞を固有名詞的に転用して無冠詞。

C: 集合名詞

同種の個体の集まり(これもひとつの実体である)を把握した名詞。同種の個体に共通する普遍的性質を概念化したもの。

英文法の難所のひとつであるが、集合名詞の複雑さは図4と図9が示すように集合名詞が普通名詞から物質名詞に至る過渡的ゾーンに分布するからである。

集合名詞は個体の集まりを人間・生物・小物の三様に大別して認識している。以下、これまで例がないと思われる分類を試みる。

① 人間の組織の「組織名詞」

集合名詞のうちもっとも普通名詞に近いのは人間の組織に関するもので、これを「組織名詞」と呼ぶことにする。

人間の組織にはリーダーがおり、目的や感情を共有し役割分担もあって、強いまとまり感＝「個」感覚がある。だから普通名詞と同じく a(n) もつくし -s も可能である。

administration (行政部), army (軍隊), association (組合), audience (聴衆), class (クラス), club (クラブ), company (一行), committee (委員会), crew (乗組員), crowd (群集), family (家族), government (政府機関), group ([人の] 集まり), mob (暴徒), nation (国), orchestra (オーケストラ), population (住民), staff (職員), team (チーム)

これらの名詞は -s をつけると組織そのものが複数あるという意味になる。There are *twenty committees* in the Diet. (国会には 20 の委員会がある。)

しかし同時に人間は一人一人に強い個性がある。だから組織に属するメンバー (複数) を認識の対象にすることも容易であり、そのときは単数形のままで複数扱いする。複数形にしまうと上記のように組織じたいが複数あることになってしまうからである。

family を例にとると、次のように言える。

Peter's family *is* large. His family *are* all well. (ピーターのところは大家族で、みな元気だ。)

前の family は全体をひとまとめの組織にして単数扱い。後の family はメンバー一人ずつを認識して複数扱いしている。

Japanese 型の集合名詞

目的や規律やリーダーがあって組織性が明確な「組織名詞」に対して、人間の集まりではあるが組織性が薄いものがある。-ese で終わる名詞がその代表例で、個性性は明確なので数詞はつけられるが -s はつけないことによって組織性の薄さを表現する。これは次項で述べる「群れ名詞」と同じ扱い方である。

Japanese (日本人), Burmese (ビルマ人), Chinese (中国人), Portuguese (ポルトガル人), Siamese (シヤム人), Taiwanese (台湾人), Viennese (ウィーン人)

たとえば Japanese は a Japanese (一人の日本人), two Japanese (二人の日本人), many Japanese (多くの日本人) などと使うが、Japanese に複数形はない。Japanese は元来形容詞であるし、大文字ではじめることが示すように固有名詞的でもあるので -s はなじまない。-ese という音に複数っぽい響きがあることも複数形にせずに使うのに都合がよい。これらの名詞は「それらの人々に固有の言語」の意味で使われるときは抽象名詞であり、かつ固有名詞 (大文字ではじめる) でもあるので冠詞はつかない。speak Japanese (日本語を話す) なお、-ese 型の集合名詞は the をつけることで全体を指す。the Japanese (日本人全体)。

people は意味の違いで使い分ける

「組織名詞」のうち、people には二つのケースがある。

①「国民」とか「ある地域の住民全体」(たとえば大阪市民) という意味では、people は「組

織名詞」である。組織性（行政、歴史、境界、戸籍、文化などによるまとまり感）があるからである。the peoples of Europe（ヨーロッパの諸国民）Yokohama: History of a People（横浜 - ある地域住民の歴史……本のタイトル）

②「(漠然と) 人々」「世間」という意味では組織性がないから a(n) をつけないし -s をつけることもない。しかしそのなかの人間たちは一人ずつ個性が認識できるので複数扱いとなり、「数える」こともできる。Four people died in the accident.（その事故で四人が死亡した。）このように four と「数えて」おきながら people じたいは単数形のまま複数扱いする。

「the つきの集合名詞」

the をそえて人間の集合を指す名詞がある。

the youth/the elderly（若者/老人）、the public/the elite（大衆/エリート）、the majority/the minority（多数/少数）、the jury（陪審員団）、the cast（出演者全員）

これらは、頭のなかで集めただけ、ないし一時的な集まりにすぎないので family ほどのまとまりがない。そのため a(n) をつけるにはふさわしくない。そこで限定感を表す the を使って、観念上ないし一時的な人間の集まりであることを表現している。こうした語は全体をひとつと意識すれば単数扱いだが、バラバラの個人の集まりとして意識したときは単数形のままで複数扱いする点で「組織名詞」と同じなので、「the つきの集合名詞」とでも呼べる。なお、上記の the jury（陪審員団）、the cast（出演者全員）の場合は裁判所や劇団といった親組織の一部という限定感からも the がついている。

the police はいつも複数扱い

the police（警察、警官隊）は、形は「the つきの集合名詞」であるがもっぱら複数扱いであり、単数扱いすることはない。The police are searching for the car.（警察はその車を捜している。）

日本語でも「警察が来た」と言うと、警官一人であっても警察組織そのもの＝警官の集合体がやってきたという語感があるが、the police は複数形にしないで複数扱いするという微妙な言い方でそういう「警察」の独特の性格を表している（同タイプの名詞に the clergy（聖職者たち）、the aristocracy（貴族）など）。

「警察」ではなく「警官」と言うためには、a police officer, a policeman, a policewoman, a cop などという（clergy の場合は、a clergyman, a clergyperson など）。

なお、police や clergy の the は、地域や国家のなかの唯一物であるがゆえの the、または「府当局」「教会組織」によって限定されたための唯一感の the である。

② 生物の群れの「群れ名詞」

次に、人間以外の生物の「群れ」を指す集合名詞がある。個性性をもつ生物が集まった群

れはたんなる均質な物質ではないから数詞をつけることができるが、人間の組織のような秩序はないので組織名詞よりも一歩物質名詞に近づいた扱いをし、常に単数形となる。これを「群れ名詞」と呼ぶことにする。

carp (コイ), fish (魚), sheep (ヒツジ), livestock (牛, 豚, 羊, 馬などの家畜の集まり)

こうした生物は一個ずつとればじゅうぶん個性があるから, a sheep, two carp, three fish, ten livestock と言えるが, sheep や carp や fish や livestock の「群れ」じたいは常に流動して決まった外形がないし, リーダーもおらず目的意識もなく, メンバーにさしたる個性もない。そこで英語では, こうした生物の群れ全体は a lot of carp などと量の大小として認識し単数形(量)で表現する(「広島カープス」ではなく「広島カープ」)。

普通名詞にもなる群れ名詞 hair

生物の一部分である hair (髪) は「群れ名詞」である。その個性から一本なら a hair と言える一方, 「群れ」(頭髮, 体毛など)になると「量」(物質)として認識して, a(n) も -s もつけない。She has golden *hair*. (金髪だ。) ここまでは「群れ名詞」そのものであるが, 衣服についたときのように個性が明確に認識できる場合がある。そのときは数詞をつけるし -s も表現化して, まったくの普通名詞となる。There are *three hairs* in my soup. (スープに髪の毛が三本入っている。)

物質名詞だが普通名詞にも使える wood, fruit, food

樹木の断片や果物の房のように植物性の集まりは「群れ」のようにも見えるが, 英語では個性を無視できる「量」と認識するので物質名詞である。

たとえば樹木を切った「たき木」の集まりである wood は物質扱いで, a(n) も -s もつけない。put *wood* on the fire (まきをくべる) これを一本, 二本と数えたければ, a piece of wood, two pieces of wood とする。ただし樹木の種類を言うときは他の種類との比較における個性を認識するから a wood と言うことも可能。Teak is a hard wood. (チークは堅い木である。) なお, woods としたときは樹木の複数性を認識した普通名詞で, 「森」または「何種類かの木」の意味になる。

fruit は果実一般のことであり生物的な「群れ」のようにも見えるが, 重量や体積など量で取引されるイメージがあること, 根や茎など全体の姿をイメージすると個性が認識しにくいこと, 容易に個性を失って断片化したり液状になるといった特性から, 個性を無視して物質名詞として扱う。ただし多種性を強調するときは普通名詞化して fruits ともいう。

食物 food には生物性のものが多いが, fruit と同様の理由から物質名詞である。ただし多種性を強調するときは foods ともいう。

なお, 野菜 vegetable は多種の野菜をいうが, 土中の個体ごとに丸ごと収穫したり購入す

るイメージからか普通名詞で, *a vegetable*, *vegetables* などと使う。

③ 雑多な製作物の「小物名詞」

人間でも生物でもない同種の雑多な製作物の集まりは, 物質名詞と概念内容(認識)は同じではないが, 扱い方は完全に物質名詞と同じとなる。これを「小物名詞」と呼ぶことにする。

baggage・luggage (手荷物・かばん類), *clothing* (衣類), *confectionery* (菓子類), *cutlery* (ナイフ・フォーク類), *equipment* (装備), *fiction* (小説類), *furniture* (家具類), *jewelry* (装飾小物類), *machinery* (機械類), *merchandise* (商品), *poetry* (詩類), *poultry* (食用の鳥類), *stationery* (文具類), *tableware* (食卓用器具), *underwear* (下着類), *weaponry* (兵器類)

たとえば *furniture* (家具類) は *a table*, *a chair* など, 家具の役割をもつ個物を統括する語で, 共通する外形がなく単一の物質ともいえない。しかし多くが木材でできており, 頭のかや引っ越しの際に集めてみれば量的な大小も感じられる。そこで英語では物質名詞的(量的)に把握するのである。

There is much furniture in the house. (その家には家具が多い。)

混成名詞は *a(n)* も *-s* も数詞も使えない(「数える」には *two pieces of furniture* などとなる)。

混成名詞的な抽象名詞

ちなみに, 混成名詞に似て「*a(n)* がつく不ぞろいなもの」のよせ集めだが物質性のまったくない抽象名詞がある。

weight (重量) は *a ton*, *a kilogram*, *a pound*, *a gram* といった単位を総括した抽象名詞である。
Bananas are sold by weight. (バナナは量り売りです。)

time (時間) は, *a millennium*, *a century*, *a decade*, *a year*, *a month*, *a week*, *a day*, *an hour*, *a minute*, といった単位を総括した抽象名詞である。

number (数) は, *a billion*, *a million*, *a thousand*, *a hundred*, *a dozen*... といった単位を総括した抽象名詞である。ただし, 具体的な「数字」を意味するときは個性性(文字の形など)が認識できるから *a number*, *numbers* といえる(普通名詞)。

ほかに *volume* (体積) や *area* (面積) も多様な下位単位を総括した抽象名詞である。

D: 物質名詞

物質の普遍的性質を概念内容とする名詞。

air (空気), *bread* (パン), *coffee* (コーヒー), *light* (光), *money* (金), *oil* (油), *oxygen* (酸

素), pork (豚肉), rice (米), salt (塩), smoke (煙)

物質の普遍的側面とは、いいかえれば等質性である。たとえば water (水) は外形が一定せず混ぜ合わせることもでき、どこをとっても water と呼べる普遍性＝等質性をもっている。

個々の物質は科学的には複雑な概念であるが、日常的には均質な性質をもつと認識されているので、普通名詞よりも実体性が薄い。

物質名詞かどうか判断するには、「それは形の名前か？」と考えてみると役立つ。たとえば「水」はその等質な性質につけた名前であって形の名前ではない。

物質名詞の普通名詞化

物質名詞はその物質からできている個物 (普通名詞) の表現に転用できることがある。

a copper (銅貨), a glass (鏡), an iron (アイロン), a light (灯火), a paper (新聞), a stone (小石)

E: 抽象名詞

抽象名詞は同種の行為や状態が共通してもつ属性を実体化してとらえた名詞である。

beauty (美), diplomacy (外交), mathematics (数学), peace (平穩), violence (暴力)

物質名詞が物質の性質をいうのに対して、抽象名詞は非物質 (行為や状態) の性質をいう。

物質名詞は固有名詞に似てそれ自身が一貫してもつ性質 (普遍性) を概念化したものであるが、抽象名詞は普通名詞に似て同種の他の個物との共通性 (普遍性) を概念化したものである。

物質名詞の場合、物質の性質を概念化することは実体 (物質) そのものを概念化することと等しいが、抽象名詞は非物質的な属性を実体から観念的に分離し、それを実体化した概念である。

属性には実体の運動である動的属性 (行為) と、比較的安定した様態である静的属性 (状態) とがあり、ふつう動的属性 (行動) は動詞によって、静的属性 (状態) は形容詞によって表現されるが、こうした属性がいくつもの実体に共通すること (普遍性をもつこと) を実体的に把握して表現したのが抽象名詞である。英語の抽象名詞に動詞や形容詞から転成したものが多くはこうした理由による。

抽象名詞は動詞や形容詞に特定の語尾をつけて作ったものが多くある。「普通名詞を作る語尾」や「固有名詞を作る語尾」が考えにくいのに対して、抽象名詞には次のように「抽象名詞を作る語尾」が存在する。

動詞から作った抽象名詞の例

- AGE: *leakage* (漏れ)
- AL: *approval* (承認), *arrival* (到着), *refusal* (拒絶)
- ANCE: *acceptance* (受納), *appearance* (出現), *performance* (実行)
- ERY: *delivery* (配達), *discovery* (発見), *recovery* (回復)
- MENT: *agreement* (一致), *arrangement* (整理), *employment* (雇用)
- SION: *collision* (衝突), *decision*, (決定), *division* (分割)
- TION: *education* (教育), *organization* (組織), *attention* (注意), *solution* (解決)
- URE: *departure* (出発), *failure* (失敗), *closure* (閉鎖)

形容詞から作った抽象名詞の例

- ANCE, -ENCE: *importance* (重要), *absence* (欠席), *presence* (出席)
- ITY: *ability* (能力), *activity* (活動), *equality* (平等)
- NESS: *darkness* (暗さ), *happiness* (幸福), *kindness* (親切さ), *deliciousness* (おいしさ)
- TH: *length* (長さ), *strength* (強さ), *truth* (真実)

上記のような行為や状態についての人間の感覚は度合性をともなうものが多くある。たとえば *experience* (経験) や *length* (長さ) という概念は「深い経験」とか「ある程度の長さ」といった度合性を含んでいる (止揚している)。これに対して普通名詞 (たとえば *car*)、物質名詞 (たとえば *paper*)、固有名詞 (たとえば *George*) は、度合性の認識を含まない。「ある程度まで車」とか、「中位まで紙」とか、「ちょっと *George*」とは言わない。

抽象名詞の普通名詞化

抽象名詞は行為や状態を述べるが、行為や状態の時間的なまとまりや結果すなわち個性に着目したときは普通名詞としても使える。この例は非常に多い。

achievements (成し遂げたこと), *a discovery* (発見したもの), *an invention* (発明品), *a kindness* (親切な行為), *New Arrivals* (新着商品。店の表示), *a victory* (一勝)

おわりに

英語の実体観すなわち五種類の名詞の相互関係を二つの図で示して、本稿のまとめとしよう。

図 8 は、伝統的形式論理学でいう概念の内包 *intension* と外延 *extension* によって名詞の相互関係を示したものである。

概念は対象をその普遍的側面でとらえた認識であり、ひとつの概念には通常ひとつの語が対応する。ひとつの語が成立するには、その音声や文字は「こうあるべし」と規定する言語規範が必要であり、これを語彙と呼ぶ。ひとつの概念に対応してひとつの語彙があるから、**語彙が規定する対象は概念が規定する対象すなわち内包にあたる**。人は心内で概念を作ったとしてもそれを語彙にするとは限らないから、概念と語彙は区別する必要がある。概念の内包はその種のもののすべてに共通で不可欠な側面（普遍的側面）である（形式論理学ではこれをその種のものの**本質**という）。

よく知られているように、内包が多いものほど外延は少なく、内包が少なくなるにつれて外延が多くなる。図 8 が示すように、固有名詞とは外延がひとつしかないもののことであり、それだけ内包が豊かである。〈固有名詞はもともと実体性が濃い〉と本稿で述べたことは、論理的にいうと〈固有名詞は内包がもともと豊かだ〉ということである。以下、普通名詞→集合名詞→物質名詞→抽象名詞の順に内包が薄くなり外延が大きくなる傾向がある（必ずそうなるとは限らないが）。これを図 8 は裾広がりの円錐で表している。これが五種類の名詞の相互関係を示す形式論理的な方法である。

他方、図 9 は二本の座標軸を使って名詞の相互関係を示したものである。英語の実体のとらえ方には、まず物質的⇔観念的の二方向がある（タテ軸）。また、概念がもつ普遍性には固有性⇔通有性の二種がある（ヨコ軸）。

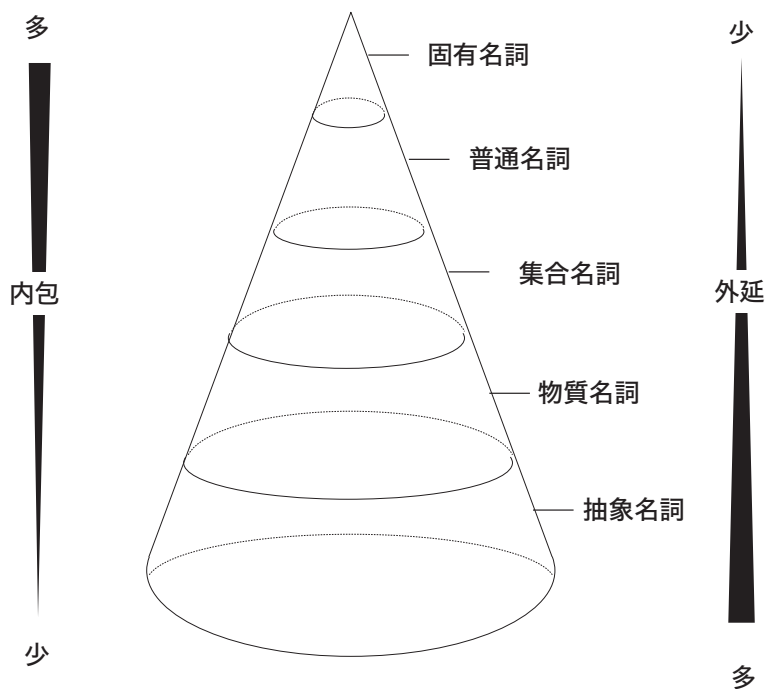


図 8 英語名詞の内包と外延

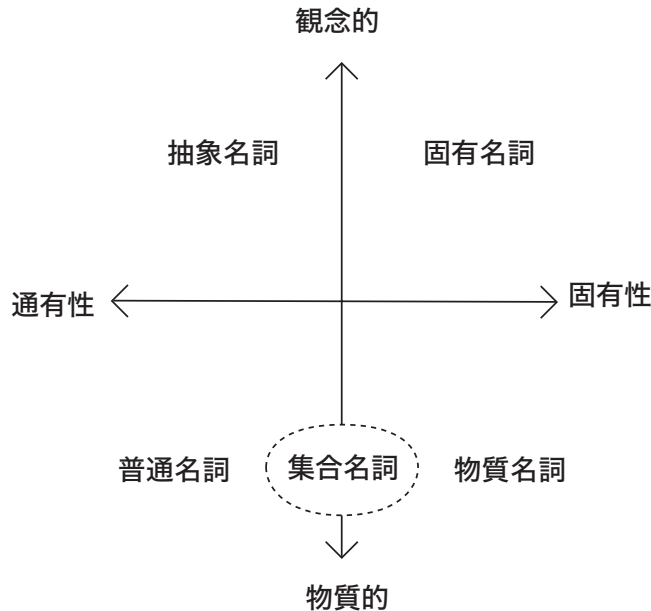


図 9 英語名詞の相互関係

図の右側の**固有性による普遍性**とはある実体の内部における共通性のことであって、固有名詞は観念的にとらえた対象のそれ自身との共通性を、物質名詞は物質としてとらえた対象のそれ自身との共通性を概念化したものである。他方、図の左側の**通有性による普遍性**とは他の個体（実体）と比較した場合の共通性のことで、普通名詞は物質的にとらえた複数の個体のあいだの共通性を、抽象名詞は観念的にとらえた複数の個体のあいだの共通性を、それぞれ概念化したのが起源である。集合名詞は普通名詞から物質名詞にまたがっており、個性性をそなえた実体の集まりのそれぞれの個体間の共通性（組織性・群れ性・小物性）を認識して概念化したものである。こうして図 9 は五種類の名詞の相互関係と移行の原理を示している。

図 9 における名詞の相互関係を図 5 であげた語で例解すると、ブタの John（固有名詞）という名前は同種の個物との通有性においてブタ a pig（普通名詞）の呼ばれるもののひとつをとりあげ、その一頭の内部で時空を超えて観念的に一貫する性質（固有性）を抽象して a pig に付加したものである。他方、John=a pig を畜産物とみると財産 = 物質名詞に近づき、これを livestock（集合名詞）と呼べる。以上の John, a pig, livestock は、その内部で一貫する物質的性質（固有性）を認識すると豚肉 pork となるし、a pig どうしや他のものと共通する性質（通有性）を観念的に抽象して deliciousness（おいしさ。抽象名詞）と表現することもできる。

このように、対象はひとつであるにもかかわらず五種類の名詞が成立している。これは言語が対象そのものではなく多面的な対象から抽象した、ある側面の認識を原型とすることの

あらわれである。図 4 で示した＜固有名詞→普通名詞→集合名詞→物質名詞→抽象名詞＞という序列は、以上の相互関係を対象の実体性の濃淡という尺度で概括したものである。

外観（形式）は同じなのに種類（内容）が移行する名詞の例は本文中に挙げたが、これは名詞の概念が多面的であるため、図 9 に示した物質的⇔観念的、固有性⇔通有性の軸に沿って認識が運動することを表わしている。

本稿で分析した名詞はさしあたり図 2 の S の位置すなわち弁証法でいう「即自」の段階にある。しかし豊かな内包と普遍性をもつ名詞を軸にして、話者は即自にとどまることなく「即自かつ対自」というより高次の認識への止揚をめざす。この運動が英語の文の本質である。

英語は実体＝名詞を柱として運用する言語であり、名詞の理解なくして英語の理解はありえない。

(2010 年 11 月 3 日 受理)